



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	新中国の三毛：『三毛翻身記』（1951）を読む
Author(s)	加部，勇一郎
Citation	連環画研究，7，87-109
Issue Date	2018-03-10
DOI	https://doi.org/10.14943/2115.98462
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98462
Type	departmental bulletin paper
File Information	renkanga_7_87-109.pdf



新中国の三毛——『三毛翻身記』（1951）を読む

加部 勇一郎

三毛と中国児童文化

三毛は、少年の姿をしたキャラクターである。生みの親は20世紀を代表する漫画家・張樂平（1910-1992）であり、彼が1935年7月28日、『図画晨報』上に発表したものが、最初と言われる（図1）。

三毛は初め、都会に暮らすただの少年だった。1937年ころから戦時下の少年として描かれるようになり、その役割を変化させ始める。のちに『三毛従軍記』（1946）では、戦地に赴く少年兵として描かれ、また『三毛流浪記』（1947-49）



図1 『図画晨報』161期（1935.7.28）
老人のアゴヒゲを切り落とし、
自分の顔に付けて変装する三毛

では上海の街をさまよう孤児として描かれ、これら上海の大新聞に連載された作品を通じて、世に広く知られてゆく。新中国になってからは、共産党中国の下、旧中国の荒廃と腐敗を告発する子どもとして現れる。文革が終わると、「よい子」の模範として、他の子どもを導く役割を担うようになる。三毛を描いた漫画の多くは単行本化され、ドラマや映画、アニメーションに改編されて、さまざまな形で児童の手元に届けられた。そして張樂平逝去の後もなお、その遺志と版權を継ぐ者たちの活動により、児童の側に寄り添い続けている。三毛というキャラクターの、その誕生から現在までの、社会における役割の歴史的変遷と、彼の解放前の物語である『三毛流浪記』の現代的意味については、すでに本誌第四号の拙稿にまとめている¹ので、詳しくはそちらを参照されたい。

本稿は、1949年以降、新中国における三毛がどのようなものであったのかについて、『三毛翻身記』（1951）を例にしながら見てゆきたい。それは旧中国において辛酸を舐めた少年が、その苦難から解放される物語であり、新中国の子どもとして生まれ変わるさまを描いたものである。そして特に、『三毛翻身記』の、初出と単行本との版面を比べ、異同を眺めることで、修正の状況について考察する。それは三毛キャラクターの多様性と、作品をとりまく周囲の思惑を浮き彫りにすることだろう。

新中国の三毛シリーズについて

右の表は、張楽平の主要漫画作品を列挙したもの²である。ゴシックは三毛の登場する物語（以下、三毛シリーズ）を示す。まずはこれらについて、順に見ていくことにしよう。

まずは1951年、『大公報』（上海）上にて、『三毛的控訴』（三毛の訴え）が発表された（1.1-2.3）。全18枚。

内容は、解放前の上海で、三毛のような子どもが、いかにアメリカ人に苦しめら

れていたかを告発するといったものだ。事件報道の体裁をとり、5点ほど、元となる実際の事件の概要をテキストで説明するものがある。

図2は「残害児童」（子どもを傷つける）と題され、胸につける白蘭花の花飾りを売る女児が、YMCA（キリスト教青年会）の入り口で、アメリカ兵に、背中に火のついたタバコを入れられた事件を伝えている。右下の4コマ目、服の背中を持ち上げて女児を助けようとする三毛と、それを笑って見ているMP（ミリタリー・ポリス。アメリカ兵のこと）とが、対照的に描かれている。付された文字テ

キストによれば、事件が起こったのは1946年7月9日、場所は上海西僑青年会³の入り口で、この女児は、蘇州から来た王貞宝ちゃん12才。背景の建物は、実地を写生したものという。

本稿の主軸となる『三毛翻身記』（三毛の翻身記）は、その同じ年の5月、『解放日報』上で連載された（5.5-7.23）。全65枚。『三毛流浪記』後に出た、初めての、ストーリー性を具えた作品であり、『三毛流浪記』（1947-49）の前後の遍歴を語るものである。三毛が上海にやってきた顛末と、上海での苦難および解放と、新中国における転

表1 張楽平の主要漫画作品（1950-66。単行本や転載は除く）

年	月	作品名	掲載誌（掲載時期）など
1950	10	二娃子	『文匯報』（10.16-12.22）
1951	1	三毛的控訴	『大公報』（1.1-2.3）
	5	三毛翻身記	『解放日報』（5.5-7.23）
1954	1	百喻經新釈	『漫画』（翌年5月まで）
1956		父子春秋（前半）	『漫画』（後半は1958年）
	7	胡大生活漫記	『解放日報』
	8	三毛日記	『人民日報』（8.19-翌年2.27）
	10	三毛	『文匯報』
1957	1	小咪画伝	『児童時代』（12月まで）
1959	1	三毛	『少年児童画報』
	2	三毛和阿廖沙	『人民日報』（2.14）
	5	三毛今昔	『解放日報』（5.30-7.19）
1962	6	三毛——在迎接解放的日子裏	『解放日報』（6.1-9.19）
1964		小蘿卜頭	『人民中国』外文版

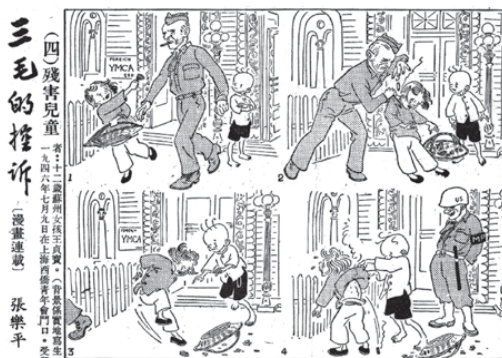


図2 『三毛的控訴』『4 残害児童』（1.6）

身について語っている。図3は工場に配属され、新中国の労働者として新たな一歩を踏み出した三毛を描いている。ただし、張樂平はこの作品を描くにあたって、大変に悩んでいたようであり、そのあたりのことについては後に触れる。

1956年の『三毛日記』は、解放前の『三毛外伝』と同様、ごく普通の少年の日常生活を記すものである。文革後にも同名の作品が発表されている。リストにある1959年の『三毛』も、同趣向のものだろう。

1959年2月の「三毛和阿廖沙」(三毛とアリョーシャ)は、ソ連の著名な漫画家である葉菲莫夫 (Boris Yefimov、1900-2008) との合作である。中ソの友好を祝して、両国

連載
三毛翻身記
張樂平

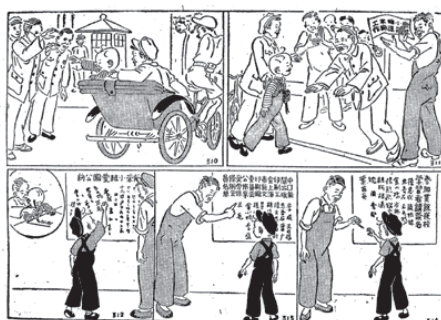


図3 『三毛翻身記』「65 三毛從此翻了身」(7.23)



図4 三毛とアリョーシャ
(馮雜音主編『永遠的三毛』p.56からの転載)

の児童が互いに紅いスカーフを結び合うさまを描く⁴ (図4)。

同年に『解放

日報』で連載が始まる『三毛今昔』(三毛の今と昔)は、この時期の代表作といべき作品である(5.30-7.19)。二枚で一組、全22組。ある一つのテーマのもと、解放前と解放後のようすを並べて、「いまがいかによばらしいか」を語る。解放前は、『三毛流浪記』から取られ、新たに同テーマで描かれた新中国のようすと併せて掲載される。建国10周年にふさわしい趣向と言える⁵。図5は児童節(子どもの日)をテーマにした一枚。下は大道芸人に弟子入りし、子どもの日に芸を披露する三毛を描いたもの(初出は『大公報』(上海版)1948年4月4日。

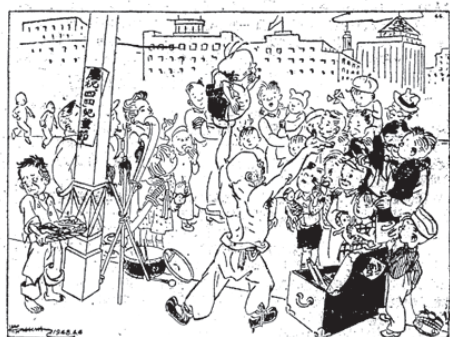


図5 『三毛今昔』(6.2)
「共度佳節」(上)、「同是兒童」(下)

タイトル同じ)。上は父親らしい男に肩車されて、雑技を見に来たところを描いている。どちらも、大人に高く持ち上げられる構図で、大道芸（雑技）という重なる要素を持つが、その意味は真逆であり、新旧の三毛、ひいては子どもの地位と待遇を端的に示す一組となっている。

1962 年の子どもの日に連載の始まった『三毛——在迎接解放的日子裏』（三毛——解放を迎える日々）は、解放前の三毛の、共産主義者の地下活動への参加を描いたものだ（6.1-9.19）。全 100 枚。これは後に、名を『三毛迎解放』（三毛が解放を迎える）と変え、いまはこの名で知られている。初回に付された張樂平の序によれば、解放前夜の上海には、共産党の地下組織について、地下活動をする子どもがいたとのことで、物語には三毛が流浪のかたわら、その種の活動をしていたようすが描かれる。図 6 は三毛が、年上の共産党員の指導で、『少年報』の記者として、自身の苦難の経験をもとに記事を書いている場面。



図 6 『三毛——在迎接解放的日子裏』
「34 新仇旧恨」(7.6)

『三毛翻身記』（1951）の物語

ここからは『三毛翻身記』の物語について、詳しく語っていくことにしよう。以下、書名のない図版はすべて『三毛翻身記』からのものである。

物語は、ある集会場から始まる（図 7）。画面には「反対美国武装日本」(アメリカの日本軍備化に反対する)、「抗美援朝」(アメリカに抗い朝鮮を支援する)、「保家衛國」(家を保護し国を防衛する)などの文字が見え、この会場が、前年に始まる朝鮮戦争に絡んだ、アメリカ中心の資本主義陣営に抗う意識を高める場であることがわかる。壇上の女性性は、解放前の苦難を、聴衆に語っている。三毛は話を聞きながら、じしんの過去を思い出し、泣き出し、



図 7 「1 控訴大会」(5.5)

自らも語り始める。こうして『三毛翻身記』の物語は、彼の回想という枠をとりながら進んで行く（が、最後までこの場面に戻ることはない）。

三毛はもともと、田舎で祖父と父親、そして母親とともに、穏やかに暮らしていた。ところがある日、村に日本軍がやってくる（図 8）。彼らは家畜を奪い、祖父を殺し、父親を連れ去ってしまう。窮した三毛は母親とともに、外祖母（母方の祖母）の暮らす上海へ向かうが、途中で母親もまた、日本兵に、腹に食糧を隠し持っていることを疑われ、銃剣で殺されてしまう（図 9）。無念を抱きながら、三毛は一人、上海の外祖母の元を訪ね、しばらくの間、二人でつつましく暮らすことになる。



図 8 「2 永無此日」(5.5)

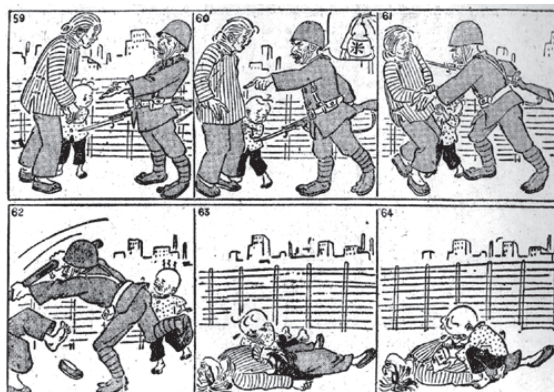


図 9 「13 母親傷身」(5.13)

1945 年 8 月 15 日、日本が降伏し、戦争が終わる。これで平和になるかと思いきや、街には新たな支配者として米兵と国民党がやってくる。図 10 は、喜び勇んでジープに駆け寄る三毛が、国民党の行軍に転ばされる場面。三毛の外祖母もまた、ほどなくして、米兵とのいざこざで死んでしまう。

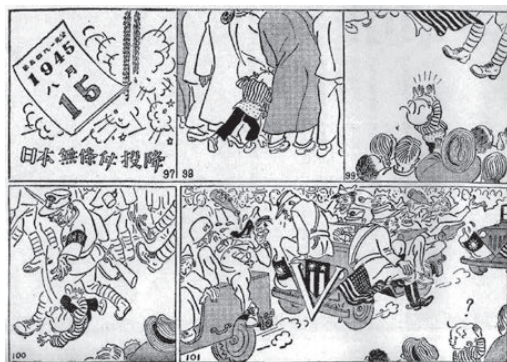


図 10 「20 惨勝行列」(5.20)



図 11 「31 不替敵人送信」(5.31)

天涯孤独の身となった三毛は、一時期、王^{ワン}という貿易商のもとで働いていた。だが、この男の元を訪れる客は、なんとも怪しい者ばかり。三毛はある時、王が憎^{にく}きアメリカ人と昵懇^{じっこん}であることを知り、与えられた服を脱ぎ捨て、屋敷を飛び出し、街へ出て行ってしまった（図 11）。

こうして『三毛翻身記』は、三毛のあの有名な流浪が、ここから始まったと説く。図 12 は、彼の流浪を「早回し」で表現したもので、この一枚にはつまり、『三毛流浪記』一冊分の内容が詰め込まれているということになる。

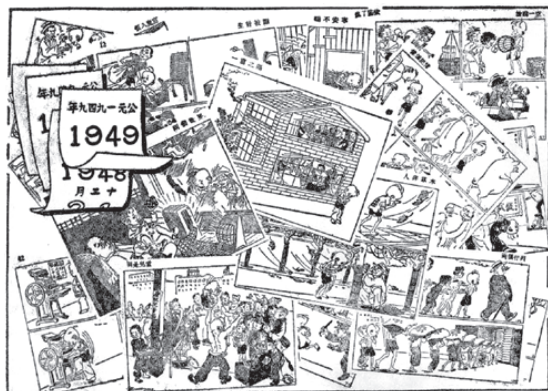


図 12 「32 黎明前的遭遇」(6.1)

図 13 は、この「早回し」の次の日の一枚。解放前夜の上海で、山のような人々が揉み合うさまを描いている。食糧を求めるデモに対し、警官は銃や警棒で対抗している。大量の旅行鞆を持って国外へ向かう者たちの傍に、腹を空かせた人々が坐り込んでいる。銀行に詰めよる者、米屋から米袋を奪う者。賑わうダンスホールの下の階では、男が首をくくっている。『三毛流浪記』にも、これと同趣向の図版が収められている(『大公報』(上海) 1948.12.3「242 大千世界」)⁷が、



図 13 「33 解放前夕」(6.2)

『三毛翻身記』のほうが、動乱のさまがより生々しい。米兵の丁寧な描き込みが見られるあたり、『三毛流浪記』にはなかった要素が認められる。

『三毛流浪記』ではこの絵をクライマックスとして、この混乱がとくに解決されるでもなく、物語はフェードアウトしてゆくのだが、『三毛翻身記』では、三毛の前に解放軍が現れ、彼がこの混乱から共産党に救われたということが、明確に表現される(図 14)。先に米兵と



図 14 「37 慶祝解放」(6.6)

国民党の行軍が三毛を転ばせる一枚（図 10）を挙げたが、解放軍の戦車^{タンク}が三毛を乗せているあたり、好対照を見せている。この一枚から先、『三毛翻身記』では、新中国の三毛が語られることになる。

図 15、三毛はある毒物事件の目撃者として、公安で事情聴取に応じている。じしんの目睹した事柄を大まかに伝える場面からのものであるが、外祖母の家を追い出されたことや、王に拾われて屋敷で働いていたことなど、彼の回想は、過去の頁^{ページ}を縮小し、貼り付けることで表現される。この安易にも映る版面製作は、図 12 に見た「早回し」と同様、過去の三毛物語には見られない。三毛は、その毒物事件の首謀者を、かつて働いていた王の屋敷で見かけたことがあったのだった。こうして彼は、公安に協力する運びとなり、王の屋敷への潜入捜査を請け負うことになる。

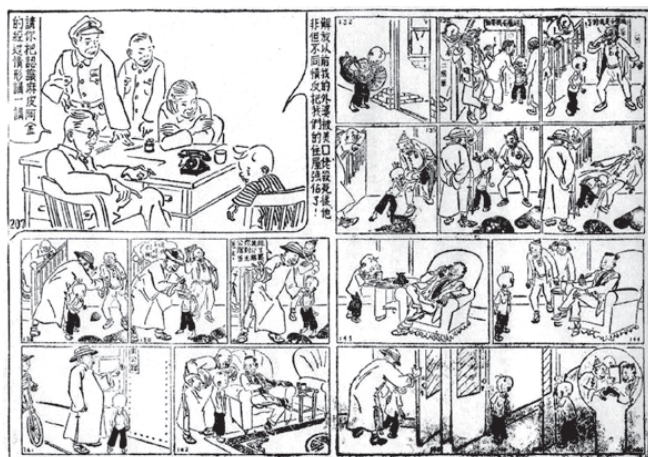


図 15 「44 報告経過」(6.14)

三毛は王の屋敷で再び使用人として働く傍ら、屋敷に仕掛けられたからくりや、仲間の人数、アメリカ人との怪しいブツのやりとりなどを逐一観察し、外の公安の仲間に報告するといった活躍を見せる。あるとき、王が友人らを招いてパーティを開くことになった。そう三毛から伝えられた公安は、そのパーティを突入の好機とした。

図 16 は、突入直前の緊迫する一瞬を捉えたものである。屋敷の中では、集った客が乾杯の声を上げている。外では、公安が銃を執り、屋敷を包囲している。このような、広範囲を収める絵は、張樂平の得意とするところでもあった。画面中央、ドアの所に立っているのが三毛である。彼はこの作戦で、塀の門を中から開くという役目を担っている。内外の呼吸はぴったりと合い、作戦は首尾よく成功し、敵は一網打尽となった

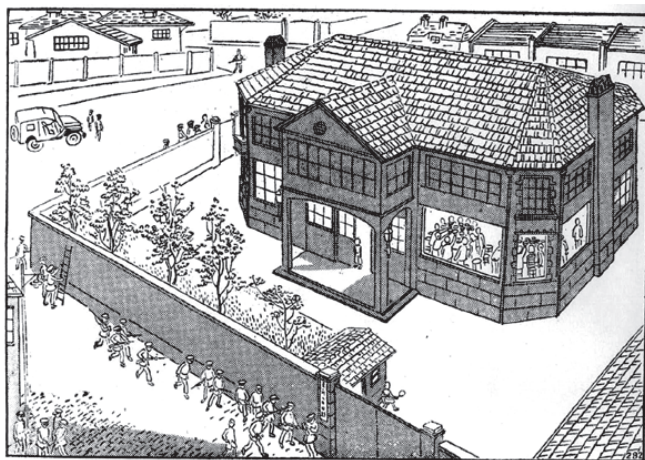


図 16 「58 把匪窟团团围住」(7.11)

た。三毛はいそぎ、屋敷のからくりを伝え、隠し部屋にある拳銃や毒物や怪しいリストなどを、証拠品として押さえる手助けをする。大活躍を遂げた三毛は、人々に暖かく迎え入れられ、労働者として工場に配属される。こうして彼は、新しい国家を担う一員として迎え入れられたのだった（図 3）。

『三毛翻身記』の変容について

上に見た『三毛翻身記』の物語は、『三毛流浪記』など解放前の三毛物語と比べたとき、総じて、ストーリーや版面構成などの点で、複雑になっていることを指摘できる。コマは細分化され、セリフによる説明が多用される。すでに触れたような、前に出した図版を縮小して貼り付ける、といった製作手法もまた、同じ流れの上にあるものと言えよう（図 12、15）。

その傾向を端的に示すのが、図 17 のような図版である。これは、^{ホアン}黄なる男が、酒屋を介して毒を撒こうとする策略を、三毛が未然に防ぐ場面からのもの。黄は前の一日で、酒屋から醤油を一瓶買い、それをより良いものと交換する振りをして、毒入り醤油とすり替えることで、それが戻された酒屋の醤油樽じたいを汚染しようとしている。この日、事情を知らないままに遣いに出された三毛は、酒屋へ行く途中、その毒入り醤油の瓶を公安の仲間に渡すことで、黄の陰謀を阻止することになる。下段右のコマは、仲間とともに黄の謀略を見破った三毛が、新たに金を出して買った醤油を、何食わぬ顔で黄に渡す場面からのものだが、黄はここで、^{おお}毒を撒布し果せたつもりでいる。この一枚は、文字も多く、コマも細かく分けられ、場面も人もコマごとに変わり、とりわけわかりにくい。この種のややこしい版面もやはり、過去の三毛物語にはなかったもので、ストーリーの複雑化にともなうものであることが指摘できる。



図 17 「50 将計就計」(7.4)

同様のことはまた、タイトルからもうかがえる。本稿末尾の資料「『三毛翻身記』三種版本比較」は、『三毛翻身記』についての細かな情報を、初出と単行本二冊（後述）について整理し、あらすじや異同とともに述べたものであるが、それを見れば分かるように、それまで四字であった各話のタイトルの字数は、番号 31 のあたりから乱れ始める。それは四字の縛りを離れて、少し説明的になってゆく。理由はおそらく、ストーリーおよび版面が複雑になることと同様で、四字句のもつ曖昧さと、曖昧であ

さらにその変化は、三毛の行動自体についてもまた、指摘することができる。物語の後半部分には、三毛が警察と結託して反革命分子を捕まえる物語が描かれているが、そこでの三毛は、怪しいと思った人物の後をつけ、話を立ち聞きし、警察に密告し、鍵穴から部屋をのぞくといった、ややダークな活躍を遂げる。

[illegible]

このように『三毛翻身記』は、悪い大人の悪事を^{あば}発き、彼らを退治すべく、敵の懷に潜り込んで内情を探ったり、部屋に仕掛けられたカラクリを覗き見たりなど、「スパイ」モノさながらの、スリリングな場面が目白押しな作品とも言える。

Panel 1: A man in a suit holds a small boy. A woman in a qipao stands nearby. Caption: 655

Panel 2: The man and woman are talking. The man is holding the boy. Caption: 656

Panel 3: The man is holding the boy. The woman is talking to him. Caption: 657

Panel 4: The man is holding the boy. The woman is talking to him. Caption: 658

Panel 5: The man is bowing to the woman. The boy is standing nearby. Caption: 659

Panel 6: The man is bowing to the woman. The boy is standing nearby. Caption: 660

東の冷戦構造を緊迫させていた。一方、国内では、新国家の基盤をより固めるべく、反革命分子のあぶり出しに没頭していたのであった。『三毛翻身記』も、後半部分の三毛の活躍は、新しい時代の「よい子」の、正義感によるものであり、当時であってこれこそが「政治的に正しい」存在として、子どもの一つの模範を体現した姿であったはずだ。すでに筆者は、この時期の三毛について「外国人に虐められる子ども」と「共産党に救われる子ども」という、二つの要素を挙げている⁸が、よりたくましい「悪い大人を懲らしめる子ども」としての三毛もまた、かつては存在していたようなのである。

ただし後に見るように、三毛のスパイ活動、すなわち「悪い大人を懲らしめる子ども」という要素は、後の単行本化の際には削除される。いくら正義の側の行動とは言え、いま読むには堪えないということなのだろう。総じて『三毛翻身記』は、シリーズ全体をふり返って見たとき、タイトル、版面、ストーリー、そして三毛のキャラクターなど、さまざまな点で、どこか違和感の残る作品に仕上がってしまっている。そして、このあたりはまた、張樂平じしんが自覚していたことのようなのだ。ここで、彼の弁明に耳を傾けることにしよう。

張樂平の弁明

『三毛翻身記』製作の裏側について、後に張樂平が、みずから語っていることは、大変に興味深い。1957年5月18日上の『文匯報』に掲載された彼の「三毛何辜！」（三毛に何の罪が！）という文章には、新中国に入ってから、三毛というキャラクターに対して、周囲が張樂平に与えた助言が、こまごまと記されている。そして他にもなく、それらの助言こそが、『三毛翻身記』の迷走を招いたようなのである。

……（略）……解放後、読者は十分に三毛に関心を寄せ、私に再び、解放後の新しい三毛を描くよう求めた。だから私は、広範な読者のために新たに絵筆を執ろうと、心から考えていた。しかし私自身が、新社会の生活について、体験が足りず、把握していなかったため、かつて多くの同志を招き、三度の座談会を開いて、同志のみなさんのご協力を仰ぎたいと願った。

ちょうどこの時期、わたしは三毛についての少なからぬ意見を耳にしていた。これらの意見はわたしの創作意欲に、たいへん影響した。ある人はこう言った。「三毛は浮浪児であり、流氓無産階級であるのだから、再び描くには値しない」。ルンペン・プロレタリアート別の人はこう言った。「三毛は痩せすぎだ。彼の姿は、ただ旧社会の児童を表現するのにふさわしいのみで、しかも髪の毛が三本しかなく、明らかに栄養不足である。再び描くに値するにしても、髪の毛をふっさり生やし、太らせねばならない。そうしてこそ新面目というものである」。実際その頃、私自身がまだ太っていなかった。またある人がこう言った。「君が三毛を描いてからいままで、すでに十数年がたっていて、年を数えればもう成人しているはずだ。青年団員とするにしても、おそらく年齢は越えているよ。君がまだ彼を成長させないなら、自然に反することは免れないよ」。こういった考え方は、実にわたしを途方に暮れさせ、ために創作意欲を落ち込ませることを免れなかった。

さらにひどいことに、1952年、上海の文芸界が整風運動の最中にあった時、ある党員の同志が鑑定でもするかのようにこう言われたのだ。『三毛流浪記』は

『武訓伝』に等しい」。これはわたしをさらに途方に暮れさせたのだったが、理由を出してこの意見を否定することもまたできず、相手は党员、いつでも自分より正しいわけで、こうして幾日も眠れない夜を過ごしたのだった。わたしはついには、それでも氣力を振り絞り、夏衍同志のところへ行っただが、彼はとてもわたしを支持してくれ、さらにわたしのために一編の序文を書いてくれ、また作品集を出版するための後押しをしてくださったのだった。これは本当に、わたしを起死回生の気持ちにさせた。のちにわたしはまた、『解放日報』の後押しを受け、『三毛翻身記』を描いた。しかし上述のような、清規戒律（繁雑で意味の無い決まりごと）の影響を抜け出すことができなかったため、思想上、縮こまったものになってしまい、ゆえにその風格の上で『流浪記』とはまったく異なるものになってしまった。当時新聞社はわたしを応援してくれたが、同時にわたしに題材の点で数々の縛りをも与え、一枚一枚、政治運動と結びつけて描くよう求め、たとえば土地改革とか、アメリカの日本軍備化に反対するとか、反革命を鎮圧するとかであるが、結果、三毛は非常に謎めいた存在となり、当然ながらちゃんと描くことはできなかったのだった。⁹

この、作品発表後、六年が経った回想からは、創作の際の苦労のみならず、張樂平にとって『三毛翻身記』が、苦い思いの残る作品であつたらしいこともまたうかがえる。上の引用は大きく三つのことを述べている。

一つ目として、1950年5月23日、上海市漫画工作者聯誼会が文芸処で開催した「三毛創作座談会」について述べている¹⁰。参加者は、教育家の沈同衡（1914-2002）や児童文学者の陳伯吹（1906-97）など、名前のわかっている者だけで20数名おり、なかなか大規模なものであつたようだ。ここでは三毛について、今後描き続けるべきかどうか、またどのように描くべきか、などが話し合われたという。「三毛を成長させよ」あるいは「三毛の頭の毛を増やせ」といった要望は、三毛というキャラクターが、当時どのように受容されたかをうかがう上で興味深い。それは三毛が、形象が変更可能な、普通に成長する男児の形象として捉えられていたことを示している。いまの我らにとって、彼が子どもであり続けることや、毛が三本であることなどは、三毛が三毛があるために、備えなければならない形象的特徴なのであるが、当時にあつては疑うべきものなのであつた。

二つ目として、『三毛流浪記』が『武訓伝』と並べられたことを述べている。武訓（1838-96）は、清末に物乞いをしながら民衆のために学校を作った実在の教育家で、『武訓伝』は彼の生涯を映画化したもの（孫瑜監督、1950）¹¹。この映画は、上映当初は称賛の声が多く寄せられたが、1951年5月20日、『人民日報』に掲載された

毛沢東の社説「映画『武訓伝』についての討論を重視すべきである」を皮切りに、評価が全面否定へと一転するものであり、映画『武訓伝』とそれに対する批判は、当時の文芸政策の厳しさをうかがうことのできる代表的な事例とすることができる。上の引用に述べられる「『三毛流浪記』は『武訓伝』に等しい」ことの、その内実については詳^{つまび}らかではないが、当時、この作品と並べられることは、作品とその創作者に、重大な負のレッテルが貼られることであった。なおその後の、夏衍（1900-95）に序を書いてもらった云々のくだりについて、夏衍が『三毛流浪記』第三集（全四冊、1950年2月）に寄せた序は1950年1月に書かれたものであるから、張の記憶違いかもしれない¹²。

三つ目は、『三毛翻身記』が執筆された際、掲載誌『解放日報』側から、張に対して、少なからぬ意見が伝えられたことを記しており、本稿においてはとりわけ重要な部分である。土地改革は、地主から土地を取り上げて人民に均分するという、共産党の政策であり、解放前から進められてきたものであるが、土地改革法が成立するのは1950年6月のこと。そして、これを題材にした張楽平の作品は『文匯報』上に連載した『二娃子』^{アルワーツ}（1950年10-12月）であり、ここにもまた、張の若干の記憶のズレがあるようだが、それはともかくとして、重要なのは、『三毛翻身記』が、少なくとも六年後の張にとって、「ちゃんと描けなかった」といった後悔の念とともに記憶されている点であろう。

ただし、この文章が1957年5月に発表されたことには、注意が必要である。前年の5月に提唱された「百花齊放・百家争鳴」は、党外人士や知識人からの自由な発言を求めるものであった¹³が、当初はあまり盛り上がりを見せなかったと言われる。それを憂慮した毛沢東により、翌年の2月、「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」と題される重要講話が行なわれ、党外からの党や党幹部に対する、より積極的な批判が求められるようになるが、依然として動きは鈍いままであった。

こうして1957年5月ころ、党と党外人士の間で、意見交換のための会合や座談会が、幾度も設けられることになる。この中で、民主同盟副主席だった章伯鈞^{しょうはくきん}「政治设计院論」や儲安平^{ちよあんぺい}の「党天下論」が提出される。これは共産党の独裁化と党幹部らの特権を批判するものである。彼らの批判は、共産党の促しによってなされたものであったが、ほどなくして党は、手のひらを返し、これらを共産党政権に対立する「右派」のあぶり出しに用い、こうして「反右派闘争」へと突入してゆくことになる。

張楽平の「三毛何辜！」は、このような時期に発表された。この文章からは、謙虚さの奥に、微^{かす}かな攻撃性のようなものもまた、読み取ることができるのだが、その鋒先は、自作にあれこれと好き勝手に意見する人々に対して向けられたものなのではないだろうか。ただしその真意を明確に表わすことは、やはり当時の空気として、ため

られるものだったのだろう。散漫な筆致や前後する記憶も、ひょっとしたら、正確に読まれることを避けるためのものだったかも知れない。

『三毛翻身記』を取りあげる本稿においては、この記事からは、当時の彼の「ちゃんと描くことはできなかった」という思いのみに着目する。これはつまり、『三毛翻身記』の三毛が、彼の理想の三毛からは、外れているということだろう。そしてその理想は、後の『三毛翻身記』の単行本化の際に、大幅な修正と削除を施すというかたちで、ささやかながら叶えられることになる。

『三毛翻身記』の修正と削除について

ここでは『三毛翻身記』について、『解放日報』の初出と後発の単行本を比較し、その異同を取り上げることで、後の作者側が『三毛翻身記』をどのように修正していったのかについて見ていきたい。それは張樂平の考える、理想的な三毛をうかがうための試みと言えるだろう。

三毛シリーズ作品は、たとえば『三毛流浪記』などについては、すでに版本間の異同が多く指摘されている¹⁴。したがって以下に述べるのは、『三毛翻身記』についての、同様の調査と報告に過ぎないのではあるが、その作業からは、三毛の置かれた社会と、三毛というキャラクターを大切に守り育ててきた人々の情念をうかがうことができるようにも思われる。

『三毛翻身記』の単行本については以下の二種を使用した。

- ・単行本『三毛翻身記』（少年儿童出版社、1997）
（以下 1997 年版）（図 20）
- ・『三毛解放記』（上海三毛形象发展有限公司編『三毛漫画 典藏版』全 4 冊のうちの一冊、少年儿童出版社、2011）所収「三毛翻身記」（以下典藏版）
（図 21）

末尾の「『三毛翻身記』三種版本比較」は、初出の全 65 枚を基本として、上記二種の後発本に、どのような変更を加えられているかを、あらすじとともにまとめたものである。適宜ご参照いただきたい。

まず大きな違いとして挙げるべきは、1997 年版も典藏版も、新聞連載当時の図版を、完全には収めてい



図 20 『三毛翻身記』（1997）



図 21 『三毛解放記』（2011）

ない点である。末尾の表、番号 46 から 63 までの部分には、三毛が新中国で、反革命分子の存在をあばき、警察と協力して逮捕するという物語が描かれているが、時代を色濃く反映した物語であり、三毛の性格もまた、特殊すぎると考えられたのだろう、1997 年版と典藏版、どちらにおいても削られている。またタイトルについて言えば、上に述べたように後半部分、四字にとどまらないものが出てくるのだが、それらは 1997 年版と典藏版では四字に変えられている。『三毛従軍記』や『三毛流浪記』など、張樂平の代表作は、四字のタイトルがスタンダードであるから、そちらに形式を合わせたと考えるべきだろう。

物語についてもまた、とくに後半、画面に吹き出しや解説の文言が大量に挿入されるようになり、上に述べたように、タイトルの字数が四字の縛りを離れることとも関連して、版面全体が非常に説明的になってゆく。それは張樂平が民国期に発表した三毛シリーズ作品——絵と短いタイトルのみという、非常に抽象度の高い表現方法——とは真逆のものと言える。そのため、後に単行本化の際には、セリフが丸ごと削られるといった措置が取られることにもなっている。

以下、実例を見てゆきたい。図 22 は、三毛が一人きりの祖母をアメリカ兵に殺され、訴える手段もなく、一人で荷物を抱えて家に帰る場面を描いている。左が『解放日報』版で、右が 1997 年版である。注目すべきは、上段中央とその右である。三毛が祖母の不幸をみなに話しているとき、三角の帽子をかぶった男が、大家に裏金を渡し、自分のものにしようとしている。1997 年版では、人物が何者であることを示す「二房東」（自分の借りた部屋の一部を、別の者に又貸して賃料を取るもの）の文字以外、吹き出しとセリフが消されてしまう。これは物語から声が消えることに等しく、解放前の『三毛流浪記』などと同様、無言劇になるよう、修正が施されていることを指摘できる。

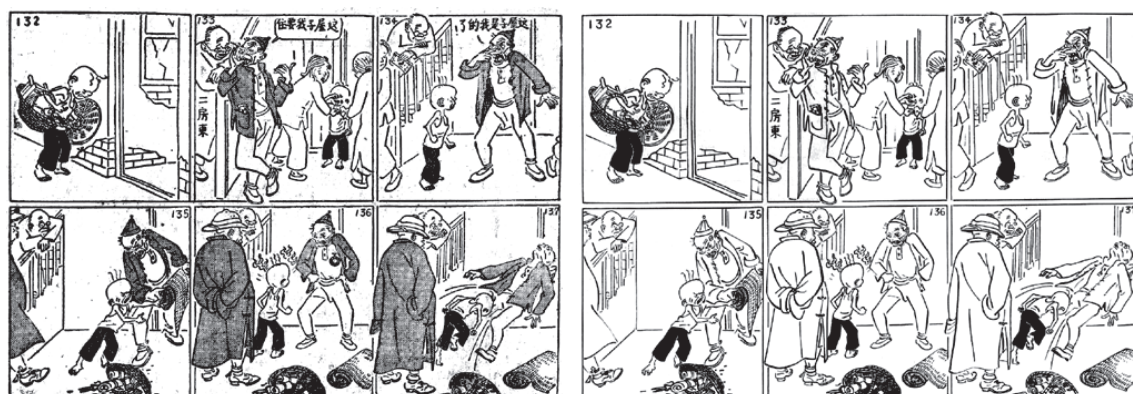


図 22 「28 住屋被佔」 左：『解放日報』（5.28）／右：1997 年版

図 23 も同様の修正が認められる例である。左は、図 11 の再掲で、貿易商の王の屋敷の中で、使用人として働く三毛が、アメリカ人に手紙を届けるよう頼まれる場面である。上段右と下段左に、セリフの削除が見られる。のみならず、上段三枚の米兵の帽子に書かれた「US」の文字もまたすべて消されている。これは、無言劇化と同時に、敵の匿名化が施されている例とすることができる¹⁵。

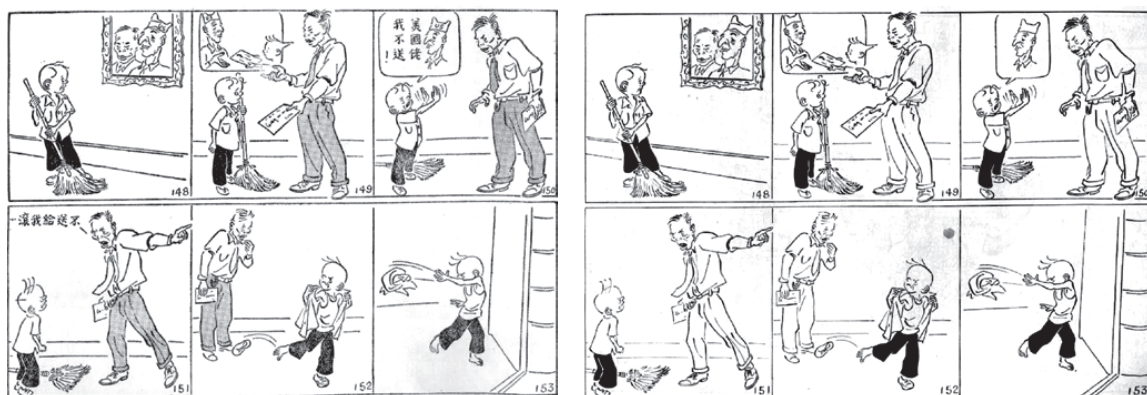


図 23 「31 不替敵人送信」 左：『解放日報』（5.31）（再掲）／右：1997 年版

敵の匿名化もまた、至るところに見られる。図 24 は三毛が、上海で外祖母とともに豆乳屋を開く場面からのもの。上手くいきかけたところ、商売敵^{がたき}の登場により客を取られてしまう、といった場を描いているが、サングラスをかけた牛乳屋の看板を^{アメリカ}ご覧いただきたい。初出で「美国」と書いてあったものは、なんと 1997 年版では、「外国」に変えられてしまっているのである。

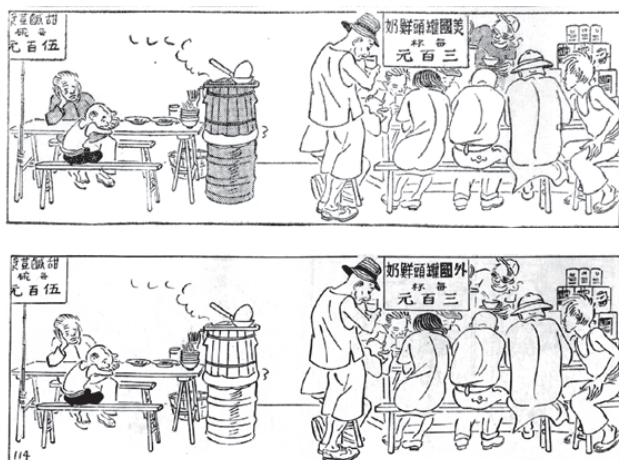


図 24 「23 生計受侵」（部分）
上：『解放日報』（5.23）／下：1997 年版

関連して、非常に興味深い例を一つ挙げたい。図 25 は、1945 年 8 月 15 日、日本が無条件降伏したあとに、通りをアメリカと国民党の旗を掲げたジープが進んでゆく場面（図 10）の、右下のコマを拡大したものだが、1997 年版ではなんと、あらゆる旗が、ごっそり黒塗りにさ



図 25 「20 惨勝行列」『解放日報』（5.20）（部分）

れてしまう（図 26 左）。のみならず、典藏版では再び星条旗のみが表われるのだ（図 26 右）。ただし、この旗のところには、もともと青天白日滿地紅旗、すなわち国民党の旗があった。つまり典藏版は、黒で塗りつぶされた上に、わざわざ星条旗を描き加えるといった操作を行なっていることになる。まるで 21 世紀に入った中国が、アメリカに対し、隠し収めていた牙を、再び研ぎ始めたかのようなでもあるが、左端のヘルメットの「US」は消されたままなわけで、なぜわざわざ星条旗のみを描き入れ、国民党の旗を消したままにしたのかは、よくわからない¹⁶。図 26 の異同からは少なくとも、典藏版の編者が 1997 年版を底本に用いたことが分かる。



図 26 左：1997 年版 / 右：典藏版

上に見てきたような、無言劇化や敵の匿名化といった一連の操作は、直接に張樂平に関わったものではないだろう。なぜなら単行本が出された 1997 年当時、彼はすでに鬼籍に入っているからである。しかし、版權を管理する遺族か、あるいは直接手を加えた修正者たちにとって、少なくとも敵の匿名化に関する操作が、張の意図を正確に汲みとった修正であるとの自負があったはずだ。そう判断されるのは、この種の操作が、『三毛迎解放』の初出（1962）と単行本（1979）の間にもまた、認められるからである。

図 27 は、「自食其果」（自業自得）と題された一枚だが、左のコマと中央のコマに記された木箱の「USA」の文字と、三毛を追いかける水夫の帽子の「US」の文字は、1979 年版にはどちらも消されてしまう。ここにもまた、敵の匿名化を見ることができるのである。



図 27 『三毛迎解放』 68「自食其果」 左：『解放日報』（1962.8.12）／右：1979 年版

建国後、アメリカは「紙老虎」（張り子のトラ）と呼ばれ、折に触れて「見かけ倒し」であると喧伝された¹⁷。児童向け雑誌をひもとけば、トラ退治の物語が繰り返し語られ、トラの図像がさまざまに描かれていたようすを



図28 『児童時代』より

左：285期（1962. 4.16）／ 右：360期（1965.6.1）

目にすることができる。図28に挙げた二枚の図像は、当時の児童雑誌の表紙からのもので、左は蔡振華「縛着它，偽装的闖入者」（偽装の闖入者を捕縛せよ）といい、右は戴敦邦「南越打虎小英雄」（南ベトナム、トラ退治の小さな英雄）という。当時のアメリカ大統領（左はケネディ、右はジョンソン）を描き、トラの縞模様「US」を織り込むのは、アメリカの描き方の、一つの定式と言えよう。とくに右の画像について、これはベトナム戦争下での子どもの模範を示しているが、今から見たとき、それが相当な過激さを伴ったものであったこともまたうかがうことができる。



図29 張樂平の描いた紙老虎
『児童時代』1959年第2号（1.16）

張樂平もまた、トラの画像を残している（図29）。胴体の炎上により、それが紙製の「張り子」であることが表現されている。トラは伝統的に、^{ひたい}額に「王」字が書かれるが（図28右参照）、「US」の文字に書き換えられている。これらの図像は、当時の「敵としてのアメリカ」の描き方がうかがえて、大変に興味深いものなのだが、詳細はまた別の機会に述べることにしよう¹⁸。

理想の三毛を求めて

初めて『解放日報』上で『三毛翻身記』を読んだときの衝撃は、忘れることができない。説明的な長たらしいタイトル、ごちゃごちゃした版面、反革命分子をやっつけるストーリー。迷走ということばが思い浮かぶ一方、こんな三毛もいたのかと、うれしくなった。張樂平そして三毛が、時代の要請から無縁ではいらなかったと、そう言ってしまうまでもだが、のちに修正が施されることを考え合わせたとき、それは大変に興味深い事象であるように思われる。おそらく、三毛なるキャラクターもしくは三毛漫画なるものは、当時まだ、いまほどに固まっていなかったに違いない。な

らば、張樂平じしんが「ちゃんと描くこと」はできなかったと述べ、後に修正が施されている、そのあたりからは、彼の（そして彼の周囲の）、三毛漫画に対する理想をうかがうことができるというものではないだろうか？

本稿で取りあげた『三毛翻身記』の異同からうかがえる彼の理想は、タイトルが四字であること、セリフがないこと、敵の姿が明確でないことなどに集約されよう。「反革命分子のあぶり出し」部分の削除は、時代の特殊性を切り捨てた結果と解釈できる。つまり総じて、抽象的かつ芸術的になっていることが指摘できるのであるが、ただそのせいで、時代により揺れ動き、多様な側面を見せる三毛というキャラクターから、「悪い大人を懲らしめる子ども」といった愉快的要素が剥ぎ取られ、まるで初めからなかったもののよう修正され、後世に伝わりにくくなってしまうのだとすれば、それは少し残念なことかも知れない。

図版出典

『大公報』（上海）、『解放日報』（東洋文庫および東京大学大学院文学部図書蔵）

『児童時代』（中国福利会児童時代社、1950-）

張樂平『三毛迎解放』（少年兒童出版社、1979）

張樂平『三毛翻身記』（少年兒童出版社、1997）

馮雛音主編『永遠的三毛』（鳳凰出版傳媒集團・訳林出版社、2006）

張樂平原作／上海三毛形象發展有限公司編『三毛漫画 典藏版』

（三毛故事集錦、全4冊、少年兒童出版社、2011）

【付記】 本稿は、2016年8月25-26日に、上海社会科学院主催のシンポジウム「文化空間与文化融合国際學術討論会」において、論題「“三毛”の歴史変遷と多様的な社会功能」として発表したものの一部を、日本語の形で仕上げたものである。この論題について、2016年12月の段階で、すでに中国語の形で脱稿し、主催者側に提出している。

- 1 拙稿「流浪する少年——国民的キャラクター“三毛”を読む」（『連環画研究』第4号、pp.66-84、2015）参照。
- 2 張樂平紀念館編『百年樂平』（上海社会科学院出版社、2010）pp.130-140「生平与創作年表」参照。
- 3 上海西僑青年会は南京西路に、欧米人向けのYMCAとして、1932年に建てられた。木之内誠編著『上海歴史ガイドマップ 増補改訂版』（大修館書店、2011）pp.8-9 および p.88 参照。
- 4 この図は、1950年2月14日に結ばれた中ソ友好同盟相互援助条約を記念するためのもので、1959年同日の『人民日報』上に、詩人であり児童文学者の袁鷹（1924-）の、中ソ友好を言祝ぐ五言詩とともに掲載された。ボリス・エフィモフは、キエフ（現ウクライナ）出身の漫画家。革命初期、キエフ大学の学生だった頃より、絵筆を執り、共産党の宣伝活動に従事し、1919年以降、共産党系の各種新聞に漫画を描き始める。1922年以降は、モスクワに移り、中央の『プラウダ』『イズベスチヤ』『クロコディル』などの新聞で、数多くの作品を発表するようになる。1950年と1951年には、その業績を認められ、二度のスターリン国家賞を受賞。「三毛とアリョーシャ」を描いた当時は、すでに押しも押されぬ存在であった。この項目、西丁主編『美術辞林・漫画芸術巻』（陝西人民出版社、2000）p.292 など参照。
- 5 同様の趣向は、1958年に作られたアニメーション『三毛流浪記』の冒頭にも見える。拙稿「流浪する少年——国民的キャラクター“三毛”を読む」（前掲）pp.79-81 参照。

- 6 中国 1950 年代の国内外の状況については、天児慧『巨龍の胎動 毛沢東 vs 鄧小平』（中国の歴史 11、講談社、2004）第三章「揺れる新国家建設」（pp.96-131）、中村元哉「国共内戦と中国革命」（和田春樹等編『岩波講座 東アジア近現代通史第 7 巻 アジア諸戦争の時代 1945-1960 年』所収、pp.235-254、岩波書店、2011）などを参照。
- 7 拙稿「流浪する少年——国民的キャラクター “三毛” を読む」（前掲）p.72 参照。
- 8 同上 p.76 参照。
- 9 張樂平「三毛何辜！」（『文匯報』1957.5.18）より。原文は以下の通り。「〔略〕解放后、读者十分关心三毛，要我重画解放后的新三毛。因此我非常想为广大读者重新拿起画笔；但因自己对新社会的生活体验不够，没有把握，曾邀请好多同志开过三次座谈会，希望得到同志们的帮助。/ 就在这个时期，我听到了不少关于三毛的议论。这些议论大大地影响了我的创作情绪。有人说：“三毛是流浪儿，就是流氓无产阶级，不值得再画。”另外有人说：“三毛太瘦了，他的形象只适合于表现旧社会的儿童，而且他只有三根毛，显得营养不良，即使值得再画，也应该让他头发长多起来，胖起来，这才是新面目。”其实那时我自己就没胖起来。又有人说：“你画三毛到现在已是十多年了，计算年龄已该长大成人了，当青年团员恐怕还要超龄呢。你还不给他长大起来，未免违反自然。”这些看法，实在搞得我非常糊涂，而创作情绪不免因此低落。/ 更有甚者，1952 年，上海文艺界整风时，有一位党员同志做鉴定似地说：“三毛流浪记”等于“武训传”。这使我更加糊涂了，但是又提不出理由来否定这意见，觉得对方是党员，总比自己正确，弄得好几天睡不着觉。我最后还是鼓起勇气去找夏衍同志，他非常支持我，并且还为我写了一篇序文鼓励再版出集子，这真使我有起死回生之感。后来我又得到解放日报的鼓励，画了“三毛翻身记”。但我无法摆脱上述的一系列的清规戒律的影响，在思想上缩手缩脚，它在风格上与“流浪记”相比真是大不相同。当时报社给了我鼓励，但同时又给了我我在题材上的种种约束，要我结合每一个政治运动来画，如土地改革，反对美帝武装日本，以及镇压反革命等……结果弄得三毛很神秘，当然没有画好。（略）」（「/」は改行を表わす。混在する繁体字は、簡体字に直している。）
- 10 「三毛創作座談会」については、馮雛音主編『永遠的三毛』（前掲）p.50 参照。
- 11 映画『武訓伝』と「武訓伝批判」については、小山三郎「映画『武訓伝』批判について」（『法学研究：法律・政治・社会』68-2、pp.285-308、慶應義塾大学法学研究会、1995）参照。
- 12 『三毛流浪記』はその後、1954 年と 1959 年にも作品集が出版されている。あるいはこちらに夏衍が序を寄せたということなのだろうか。後考を俟つ。
- 13 「百花齊放・百家争鳴」から「反右派闘争」までの流れについては、前掲天児書 pp.121-131「脱ソ連と反右派闘争」参照。
- 14 『三毛』物語における、版本間の異同については、たとえば馮雛音主編『永遠的三毛』（前掲）pp.34-47 や、材木谷敦「張樂平『三毛流浪記』の改作について」（『マンガ研究』11、pp.111-126、日本マンガ学会、2007）に、具体的に言及されている。
- 15 ここでこの「敵の匿名化」について、典藏版では不完全なものになってしまっていることを付言しておく。典藏版は図像下部に、内容を説明する文字テキストが付され、せっかくの敵の匿名化も、「アメリカ兵」「国民党」のようなことばでもって、明らかにされているからである。
- 16 典藏版はこの部分、行軍する者たちを、「アメリカ兵と国民党兵士」と明確に記す。
- 17 「張り子のトラ」という表現は、もともと 1946 年に毛沢東が述べたことばに由来する。1958 年 12 月 1 日、中国共産党第 8 期中央委員会第 6 回全体会議のあいだ、毛沢東は「帝国主義とすべての反動派は張り子のトラかどうかという問題について」と題する文章を発表し、以来「すべての反動派は張り子のトラである」ということばは、中国人民が強大な敵に立ち向かう際のスローガンとなった。
- 18 1950 年代後半から文革に到るまでの 10 年ほどの間、雑誌『児童時代』には、幾度かトラ退治に関する記事や図版が掲載され、当時の流行のようなものをうかがうことができる。上海美術電影製片廠が 1962 年に作ったアニメーション『没頭腦和不高興』にも、999 階建ての少年宮の最上階で、水滸伝に由来する「武松打虎」（武松のトラ退治）の一幕が上演されるくだりがあるが、この劇目が選択された裏にもまた、当時の「トラ退治」への意識をうかがうことができるかも知れない。

資料 『三毛翻身記』三種版本比較

★：単行本（少年兒童出版社、1997 初版）／☆：上海三毛形象發展有限公司編『三毛漫画 典藏版』所収『三毛解放記』（少年兒童出版社、2011）

	『解放日報』1951 年	★	☆	備考	内容
1	控訴大會 (5.5)	◎	◎		アメリカの日本再軍備に反対する会場にて。三毛は人の苦難の物語を聞かうちに、じしんの経験を思い出し、マイクの前に立つ。
2	永無此日 (5.5)	◎	◎	★★永無此日⇒永記此日	三毛にもかつて、両親の下で楽しく暮らしていた時代があった。ある日、村には日本軍がやってくる。三毛は両親とともに家を離れ逃げ出した。
3	慘遭劫殺 (5.6)	◎	◎		両親とともに身を潜める三毛。しばらくして家に帰ることにしたが、彼らが帰途に目にしたものは、日本軍の残虐の限りを尽くした行ないだった。
4	祖父被殺 (5.6)	◎	◎		家に残した祖父の姿が見えない。地面を染める血の跡をたどると、そこには腹を裂かれた祖父の姿があった。
5	發現敵人 (5.7)	◎	◎		牛も鶏も奪われている。ふと、三毛の耳に、女性の叫び声が聞こえ、彼は日本兵の姿をみとめる。父親に報告、二人で武器を手に向かっていく。
6	智殺日寇 (5.7)	◎	◎	★★智殺日寇⇒同心協力	父親は正面からクワで向かい、三毛は背後から敵の銃を奪う。命乞いをする日本兵。父親のクワが兵士の頭を打ち割る。ホッとする村人たち。
7	敵人復至 (5.8)	◎	×	★敵人復至⇒敵人又到	村人が三毛に見張りを頼む。三毛が木の上で目にしたのは、遠くから日章旗を掲げて村の方へやってくる日本軍の隊列だった。
8	躲入樹中 (5.8)	◎	×		木を下りた三毛。日本兵から奪った銃を河に捨てると、木のうろの中から、やってくる日本軍の観察を続けた。
9	父親被捉 (5.9)	◎	×		穴から三毛が目にしたのは、父親が日本兵に連れ去られる光景だった。日本軍は村に火を放つと、再び日章旗を掲げ、隊列を作って去っていった。
10	誓復此仇 (5.10)	◎	×		三毛は母親と合流。残された村人たちは、復讐を誓い、遊撃隊参加を決意する。ふと三毛は河に捨てた日本兵の銃を思い出す。
11	入水取槍 (5.11)	◎	×		三毛は河岸にいます。家や祖父、父親の受難を思い出し、水への恐れをふりきり、河に飛び込み、銃を拾った。
12	探外祖母去 (5.12)	◎	◎	★★探外祖母去⇒投奔外婆	三毛は村人たちと復讐に向かうことを願う。しかし、大人の仲間に入れてもらえない。彼は仕方なく、母親とともに上海の外祖母の元へ行くことになった。
13	母親傷身 (5.13)	◎	◎	★★母親傷身⇒母親喪命	上海への道すがら、二人は日本兵に出くわす。敵は母親が腹に食糧を隠しているかと疑う。母親は答えない。日本兵は怒って母親の腹を裂いた。
14	母親的血 (5.14)	◎	×	★母親的血⇒亲人的血	鬼子から逃げる三毛。銃剣の先の血を拭う鬼子。母親の腹にあったのは実家の場所を記した紙。紙についた母親の血を見て、三毛は鬼子への復讐を誓った。
15	找外婆家 (5.15)	◎	×		血のついた書きつけを手には、外祖母の家を探し歩く三毛。ようやくたどり着いた家の扉には、力ギがかかっていた。
16	祖孫聚會 (5.16)	◎	◎		三毛は戸にもたれて眠っている。そこへ外祖母が帰ってくる。彼女は、少年が娘の息子だと気づくと、三毛を固く抱きしめた。両者は涙の再会を果たす。

17	縫紉爲生 (5.17)	◎	◎	外祖母は道ばたで、裁縫の仕事をとって暮らしていた。通りを行く人々は、次々に仕事をくれた。順調に一日を終えようと、外祖母は三毛と二人、帰っていった。
18	天不作美 (5.18)	◎	×	その晩、外祖母と三毛は、侘びしくも満ち足りた夜を過ごす。三毛は寝しなに、翌日もまた順調に仕事が入ることを願った。しかし翌朝は、豪雨だった。
19	擠戸口米 (5.19)	◎	×	米の配給に並ぶ三毛。ところが、いつまでも彼の番は回ってこない。夜更け、彼の前を通り過ぎたのは、荷台に大量の米袋を積んだ日本軍のトラック。
20	惨勝行列 (5.20)	◎	◎	1945年8月15日、日本との戦争が終わり、人々は新しい社会の到来を喜んだ。しかし日本軍の後に人々の前にやってきたのは、米軍と国民党だった。
21	改換行業 (5.21)	◎	◎	外祖母は三毛に、新しい商売を始めることを相談する。二人は豆をひく白を買い、木の板を人力車で運び、大豆を用意すると、豆乳を作った。
22	生意興隆 (5.22)	◎	×	外祖母と三毛は通りで豆乳屋を始めた。客は一人増え、二人増え、用意した席が足りないほどの大盛況に。中には持参の容器で持ち帰る客も。
23	生計受侵 (5.23)	◎	◎	三毛たちの店のすぐ隣で、サン格拉斯の男が、アメリカ産の牛乳を売る屋台を始める。値段は豆乳に比べて200元も安く、三毛らは客を取られてしまう。
24	幫助生産 (5.24)	◎	◎	二人は豆乳売りを廃業し、新たに白蘭花を売ることに。材料を花屋で仕入れると、三毛は外祖母が裁縫をする横で花を売った。
25	拿了就走 (5.25)	◎	◎	二人の前を、外国人のカップルが通る。男が三毛の抱えるカゴから白蘭花を一つ手に取り、女の髪に挿すと、そのまま行ってしまった。代金を求める三毛。
26	腦羞成怒 (5.26)	◎	◎	男は代金を求める三毛を張り倒し、止めに入った外祖母もまた、殴り倒してしまふ。はずみで道路に転げ出る外祖母。迫り来るジープ。
27	草菅人命 (5.27)	◎	◎	ジープの後部と道路を染める血痕。ジープはカップルを乗せ、何事も無かったかのように行ってしまう。手をこまねいて眺める警官と途方に暮れる三毛。
28	住屋被佔 (5.28)	◎	◎	三毛は家に帰り、外祖母の最期をみなに伝える。主人がいなくなったことを知った男が、大家と結託して三毛に家を明け渡すよう迫る。三毛は頭突きで対抗。
29	做小當差 (5.29)	◎	×	端で見ていた一人の男が、三毛の勇敢さを見込んで、利用しようとしたくむ。男は三毛を、貿易商の王の邸宅に連れて行く。
30	窺到秘密 (5.30)	◎	×	三毛は王のもので、靴と服を与えられ、雑用をして過ごしていた。ふと乗客があり、彼は部屋を追い出される。鍵穴からは、王と客の前に拳銃が見えた。
31	不替敵人送信 (5.31)	◎	×	王が三毛に、懇意の米兵へ手紙を届けるよう頼んだ。三毛が断ると、王は出て行くよう命じた。三毛は服と靴を脱ぎ捨てると、王のもとを去っていった。
32	黎明前的遭遇 (6.1)	×	×	この日から三毛の流浪の日々が始まる。彼の苦難は1949年5月、上海の解放まで続くことになる。
33	解放前夕 (6.2)	◎	×	解放の前夜、まちは混乱の最中にあった。金持ちはパーティに明け暮れ、貧乏人はみずからの手で死を早めた。暴動とデモの中、三毛は一人たたずんでいた。

34	化装竄逃 (6.3)	◎	◎	☆化装竄逃⇒化装逃窜	暴動を避けて、三毛は家の陰に身を潜めている。国民党の兵士が一人やってきて、三毛に銃を向けた。男は、三毛の服を奪うと去っていった。
35	來了救星 (6.4)	◎	◎	★☆☆台詞削除	服を奪われた三毛の前に現れたのは、解放軍の兵士であった。兵士は三毛から事情を聞くと、服を取り返すべく、盗人を追っていた。
36	原物歸還 (6.5)	◎	◎		三毛が家の陰で待っていると、国民党兵士が共産党兵士に銃を向けられながら戻ってきた。盗人は服を脱ぎ、三毛に還した。
37	慶祝解放 (6.6)	◎	×		共産党軍が上海にやって来た。通りを、毛沢東の巨大な顔写真と、星のついた戦車が進んで行く。行軍に歓声をあげる人々。戦車に乗せてもらう三毛。
38	碰到仇人 (6.7)	×	×		三毛は、国民党特務を警戒するボスターを眺めている。そこに外祖母の家を奪った男が現れ、ボスターを剥がして去っていった。三毛は後をつけていった。
39	不可放鬆 (6.8)	×	×		距離を取りながら追跡が続けていると、男は有料の公園へ入っていった。三毛も、入場券を買うよう求められた。仕方なく、なければの金を支払う三毛。
40	先不放走這個 (6.9)	×	×		男は公園のベンチで若い男と待ち合わせていた。三毛はベンチの裏に潜み、二人の会話を盗聴した。相談が毒薬に関するものと知り、今度は若い男をつけた。
41	奮勇捉住 (6.11)	×	×		三毛は、男が自宅から薬物を取って来るようすを眺めている。出てきた男の足にしがみつき、大声で叫んだ。「早く特務を捕まえて！」
42	引導捕匪 (6.12)	×	×		警官が男を確保した。三毛は警官の一人に、もう一人仲間がいることを伝え、急いで公園のベンチに向かった。しかしすでに仲間は立ち去った後だった。
43	同到公安局 (6.13)	×	×		三毛と警官は、公安局へ向かう。警官は局員に三毛の活躍を報告した。三毛は、逃げた男が、毒物を撒くことで有名な麻皮阿金であることを伝えた。
44	報告經過 (6.14)	◎	×	★台詞削除	三毛は麻皮阿金について、じしんを外祖母の家から追い出した人物であること、そして、王の邸宅に出入りしていた人物であることなどを語った。
45	人人愛護 (6.15)	◎	×	★人人愛護⇒获得同情 ★「US」と台詞削除	三毛はまた、王が米兵と昵懇であったことを伝えた。公安局の人々は、事の複雑さと三毛の苦勞を耳にし、ひとまず彼に食事を与え、身なりを整えさせた。
46	先去查看這些壞傢伙的住址 (6.26)	×	×		三毛は一息つく、王の家まで道案内することになった。やって来た輪タクの運転手は、公安局で彼にお茶を勧めた局員だった。
47	一一指點 (6.27)	×	×		三毛は運転手に扮した局員に、麻皮阿金と黄胖の住所を詳細に伝えた。すると別の輪タクに、ある男が乗って出て来た。三毛はその男こそが王だと伝えた。
48	去找黃胖 (6.28)	×	×		三毛は王の邸宅に入り、潜入捜査をすることになる。昔のボロのズボンを穿いて門の外に坐っていると、黄胖が出てきた。彼は三毛の姿を目に留めた。
49	黃胖企圖利用三毛 (6.29)	×	×		黄胖は三毛に醬油を買って来るよう命じた。戻ると金と醬油を渡し、もう一度買い直して来るように命じた。三毛は黄胖に渡された醬油を局員に渡した。
50	將計就計 (7.4)	×	×		局員が三毛から受け取った醬油を化学検査に回した。すると、毒入りであることが判明する。局員は毒の入っていない醬油を三毛に渡し、黄胖に届けさせた。
51	又進魔窟 (6.30)	×	×		醬油を渡した三毛は、黄胖とともに再び王のもとへ向かう。王の屋敷にはやはり、同じ米兵と映った写真が飾ってあった。王は三毛に再び服従を誓わせた。

52	三毛進了魔窟後，黃胖——引見裏邊的那些壞傢伙 (7.5)	×	×	黃胖是三毛に、王の貿易会社の事務室で働く者たちを一人一人紹介した。いたのは、トランプをするものや、机に脚をかけて雑誌を読んでいるものなど。
53	姓王的跟美國佬鬼祟崇進了房間裏 (7.6)	×	×	三毛は外で事態を見守る局員に、王の仲間の人数を伝えた。そこに一台の輪タクがやって来る。乗っていたのは、写真に写っていたあのアメリカ人だった。
54	三毛在鑰匙眼內窺得秘密 (7.7)	×	×	王とアメリカ人のやりとりを、外から鍵穴ごしにうかがう三毛。その部屋には隠し扉があり、三毛はまた、王が仕掛けを操作する所を目にすることになる。
55	三毛記住了機關 (7.8)	×	×	アメリカ人の持つて来た品々を、王は隠し扉の奥の部屋へと運んでいく。三毛は部屋に仕掛けられたからくりをしつかりと記憶した。
56	三毛報告匪徒集合請客的消息 (7.9)	×	×	三毛は来客にお茶を出しに行った。彼はそこで、今晚パーティが開かれる情報を耳にする。三毛はその情報を外で待機している局員に伝えた。
57	大張筵席 (7.10)	×	×	客が集まり、パーティが始まる。給仕をする三毛。局員には晩の九時に公安は動く予定であると伝えられている。いま八時二十分を回ったあたり。
58	把匪窟團團圍住 (7.11)	×	×	室内ではパーティが始まっている。三毛は心配になり、家の入り口で様子を見かねて外に出る。外には大勢の銃を持った警官が、屋敷を取り囲んでいる。
59	三毛設法把大門打開 (7.12)	×	×	九時まであと少し。三毛は突入する者たちのために、門を開けなければならぬ。彼は門番を移動させ、ひそかにかんぬきを外すと、警官を招き入れた。
60	一網打盡 (7.13)	×	×	屋敷の外から銃を向ける警官と、宴会のテーブルの前に、身動きもできずに降参の構えを取る来客たち。三毛は階上の秘密の部屋へと警官を導く。
61	物證俱全 (7.17)	×	×	三毛は部屋に仕掛けられたカラクリを操作する。秘密の部屋には拳銃や秘密のリストが隠されていた。悪の一味は一斉に連行され、証拠品も押収された。
62	三毛不願穿了反革命給他的衣服拍照 (7.18)	×	×	活躍した三毛、記者から写真を撮られることになる。すると三毛、じしんの着ている服が黄胖からもらったものであったため、着替えたいと言う。
63	三毛把慰勞品折實捐獻飛機大砲 (7.20)	×	×	三毛の活躍を祝って、多くの贈り物が各方面から届けられる。しかし彼はこれらを不要とし、朝鮮戦争を支援するための飛行機や大砲に当てたいと伝える。
64	三毛要求進工廠工作 (7.21)	◎	×	公安局長は三毛に学校へ行くことを勧めるも、三毛は生産に従事したい意向を伝えた。局長は長い時間をかけて受け入れ先を探した。
65	三毛從此翻了身 (7.23)	◎	×	輪タクに乗り、局長とともに受け入れ先の工場へ向かう三毛。工場側は少年を暖かく迎え入れた。三毛は印刷工として、新たな道を歩み始めたのだった。

*タイトルの異同について、繁体字から簡体字への変更については割愛した。